

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

池工が白馬なら縣稜は穂高、大町は八ヶ岳・・・小沼拓也氏が書いてくれました

大町高校のフ千秋合宿

池工、縣稜のレポートに刺激を受け、大町の連休の様子もちらっと報告します。僕たちは9日、10日の1泊2日で八ヶ岳赤岳に行きました。思えば八ヶ岳を訪れるのは、4～5年前の冬の蓼科山以来。当時の顧問松田大さんと部員を引率して登った強風で爽快な冬山登山が懐かしい。今回は部員7名と顧問2名の計9名。8時半に大町を発ち高速は諏訪で下りた。新しく出来た人工壁をひと目見ようと茅野消防署を探すも、久しく来ていない土地のため場所が分からず道に迷い、美濃戸口には10時半到着。駐車場に入れず路上駐車された長い車列の後尾に車を止め、赤岳鉱泉めざし出発した。美濃戸山荘から上はシラビソの森に苔の絨毯が広がり八ヶ岳ムード満点。ナメ床の溪相も目を楽しませ、近くて良い山の人気も頷ける。1時には鉱泉に着き、「硫黄へ」と言おうとも思うが、くつろぐ生徒の様子を見て顧問も飲料を手にし、のんびりキャンプを楽しむ。300名収容の山小屋は団体客で賑やかだが満員ではないらしい。テントはギリでサイトを確保できた。

翌日も朝から晴れ上がり絶好の日和。6時出発。行者小屋を經由し地蔵尾根に取り付く。快適で楽しい岩尾根。途上、中山尾根を攀じる登山者も目視。前日、テントのお隣さんは小同心クラックを登ったと言っていたが、無雪期でもバリエーションが結構登られているとは知らなかった。尾根上部でツアー集団に追いつき暫く渋滞したが、路を譲ってもらおうとすぐ稜線に出た。天気は良いがかなりの強風のなか赤岳山頂に8時頃着。眼下に広がる野辺山高原に向かい、山岳部歌のお勤めをして下山開始。段差のきつい階段が続く文三郎道を下り、9時半頃鉱泉着。撤収をして、12時頃美濃戸口に到着。大町までは1時間半ほどで戻れ、その意外な近さに驚いた。

折角なので硫黄・横など縦走しても良かったかもしれないが、7日にあった強歩大会の疲れを考え、ゆったり山行を計画した。しかしさすが高校生、疲れもなく顧問が必死でしがみついたハイペースで秋山を駆け抜けた。夏合宿は連日雨にやられたがこの連休はまさに天の恵み。洗練された山ガールの質といい、アクセス・アプローチの便利さ、ルート楽しさといい、八ヶ岳ならではの良さを再認識した山行でした。

ヤスィックアゲルの奮い空 12

C1水没ドボン事件

7月31日、歌を歌って気分が高揚したのか、夜ゆっくり眠れなかった。0:30にトイレに起き、その後は夢かうつつか、次から次へと誰かどうにかトイレに行くたびに起きて、気がつくと5:30だった。今日はいよいよC1入りである。これからしばらくは雪と氷の世界となる。いつもと同じく8:00少し前にABCを出発する。不眠の割には快調である。もう4度目となるこの道はしっかりトレースがつき、僕らが来る前からあったような立派な道になっている。今度通るのは、登頂に成功して下山する時だ。9:00に広河原でヌルさんと交信。いよいよアタックに向けて新たな段階に入ったことを伝える。氷河に乗

るとその先に C1 が小さく点のように見え、さらに遙か彼方には山頂の尖塔が蒼穹に突き出ている。11:10 に C1 に到着。1 時間ほど食事をしたり、横になったり、各自が思い思いに過ごした後、偵察とルート工作に出発する。三戸呂君と僕がアンザイレンし、まず南氷河から南東氷河へと渡ることを試みる。午後になったせいで、氷河の間にはそれ



C1 目指して氷河を登る。頭上遙かに頂上が見える。右側からくる氷河の合流点のやや上部が C1。ルートはここから右股氷河へ乗り換える。

なりの水流がある。沢の先には直径 2m ほど、高さ 1m ほどの氷の塊がありいやな感じでルートを塞いでいた。その左側は水が淀んでいたのので、三戸呂君は右側を抜けて対岸へ出、そのまま 1 ピッチ伸ばしてくれた。うまくルートを開いてくれたと、続いて僕が沢を渡ろうとしたとき、ロープが氷塊の左側の下部へ潜り込み、そこにできている氷柱に絡み、ひっかかっ

てしまった。それを外そうと一足踏み込んだ瞬間、氷板と思った部分はザクザクの氷水で、腰近くまで沈んでしまった。もがいて出た

ときには腿から下はずぶ濡れ。スパッツのおかげで膝からは被害から免れたが、そうはいっても 5500m の氷河の融水、冷たいの冷たくないのって、冷たいに決まっている。しかし、薄日も当たっていたし、ズボンも速乾性で問題なさそうだったのでそのまま進む。やばいところだということは、一方で絵になるということでもある。この場面は久根さんがしっかり構えてビデオを回しており、後日の NBS のニュースの中でもしっかり流されてしまった。

こうしてトラブルはあったが、右股氷河に出ることができた。ここから 300m が急斜面である。明日以降の荷上げの便宜を図るため、フィックスドロープを 5 本伸ばした。14:15 に本日の行動を終了、適度な風もあったため、僕の濡れたズボンも乾いていた。

夕方からは天候が急激に回復し、ヤズィックアグルが夕陽を浴びて光って見えた。だが、6:00 頃より吹き始めた風の強さは半端ではない。バタバタとテントを震わせ、山頂では雪煙がさかんに上がっていた。そんな、夕方のテントでは一つの心配事が話題になっていた。9:00 の交信を最後に、BC のヌルさんと連絡が取れなくなってしまったのだ。悩みの種ではあったが、C1 入りした今、帰るわけにもいかない。このときはしかし、まだ一時的な故障くらいに考えていたのだが、事態は深刻であった。

編集子のひとごと

後立山、穂高に続いて大町は八ヶ岳。中信地区の高校山岳部は健在し、健全な活動をしている。長野に住む我々が本当に山に囲まれた恵まれた場所にいる幸せを感じる。中信からは遠い感じがする八ヶ岳だって他県から来ることを思えば誤差の範囲。紅葉こそイマイチだったが、今連休は天候に恵まれてどこの山でも秋山が満喫できた。(大西 記)